

教育と文化

みんなで
考えよう
人権・同和問題
No. 241

このコーナーは、隔月のシリーズで掲載しています。これを手がかりに、家庭で人権・同和問題について話し合ってみましょう。

けがれ意識を考える

親戚に不幸があり、県外での告別式に出席しました。式が済み、火葬場での出来事です。遺族が、用意されたお菓子をつまみながらよもやま話に花を咲かせているとき、係の人が納骨の準備ができたことを伝えに来ました。そして「テーブルの上のお菓子はそのままにしておいてください。持ち帰らないでください」と言ったのです。

その真意は分かりませんが、死はけがれであり、そのけがれに触れたものを外部に持ち出して、広めることがないようにとの配慮だったのかもしれません。

思いがけない言葉に顔を見合わせたものでした。このよな意識はすでに消滅したと思っていました。しかしながら、まれに告別式で『清めの塩』をもらうことがあります。まだまだ死は忌み嫌うものという意識が心の底にあるので

しょうか。

中世の日本では、自然の状態を変えたり、死や出血など通常とは異なる状態になったりすることを、『ケガレ』と呼び恐れていました。けがれに触れる仕事や元に戻す仕事をする人々は、それが大切な仕事であるにもかかわらず、恐れられ、差別されたのです。当時の法律（延喜式、927年）などの影響もあり、けがれ意識が部落差別につながったと言われています。

部落差別は過去の話、自分には関係ないと思う人もいるかもしれませんが。確かに見えにくくはなっていますが、いまだに差別に苦しむ人がいるのも事実です。

私たちの無意識の言動が、差別に加担しているかもしれません。もう一度日頃の行いを見つめ直し、差別の芽を摘み取る姿勢が大切ではないでしょうか。

郷土の文化財

伊万里の城館跡シリーズ①

● 問合先 生涯学習課文化財係 ☎ 3186

川原城跡

川原城は、松浦町桃川字幸平に所在する山城跡で、眉山から西に伸びる標高約110mの山塊に立地します。

主郭があつたと推測される山頂部は造成され、杉林となつています。一方で、山頂部から北西に派生する尾根先端部には、曲輪が残されています。曲輪は尾根上で堀切と土塁によつて区画され、堀切はさらに尾根の両斜面まで伸びて堅堀と一体化しています。

江戸時代の文書によれば、『河原四郎遊』あるいは『川原勘四郎平道秀』『赤木治部太夫藤原彦秀』なる人物が川原村を治めていたとされていますが、後世の記述であり、確かなことは分かっています。

現存する尾根先端の曲輪

へは、北野の集落から北西に向かう里道の終点より、図のとおり進むとたどり着けます。残されている曲輪は区画を示す遺構が比較的しっかりと残っており、主郭との隔絶を強く意識した造りがよく分かります。



↑川原城跡位置図